

## 鵜飼という漁法

鵜飼(うかい)と言って思い浮かべるのは、岐阜県長良川(ながらがわ) 鵜飼だと思います。かがり火につられて集まってくるアユを、鵜舟に乗った鵜匠が何羽もの鵜をあやつり、捕まえる様は見事としか言いようがありません。

長良川鵜飼は宮内庁の御料鵜飼であり、皇室の保護のもとで行われています。鵜匠は宮内庁式部職鵜匠として国家公務員の身分をもち、鵜飼という伝統文化を後世に伝えていく仕事をしています。

長良川以外の地域でも鵜飼が行われています。おそらく鵜飼は、漁の一つの方法として、鵜のことをよく知っている人々によって全国に広まっていったと考えられます。例えば、現在、東京都と神奈川県の間を流れる多摩川では鵜飼は行われていませんが、以前は行われていました。江戸時代の浮世絵師・安藤広重の錦絵<sup>★14</sup>には、多摩川の鵜飼が描かれています。このように、鵜飼は記録にあるだけでも全国150か所以上で行われていました。しかし、網漁の発達により、漁としての鵜飼は衰退していきました。

現在、鵜飼は全国12か所で行われていますが、漁としての鵜飼は御料鵜飼だけで、あとはすべて観光のための鵜飼です。

毎年、夏に笛吹川で行われている石和鵜飼も観光鵜飼の一つです。石和鵜飼は、鵜匠が舟に乗らずに歩きながら鵜を操る徒歩鵜(かちう)という珍しい漁法を用いています。

- ★13・・・式部職は、宮内庁の内部部局の一つ。
- ★14・・・錦絵(にしきゑ)は、浮世絵の多色刷りの木版画のこと。



◀長良川鵜飼



▶ 笛吹川の石和鵜飼  
徒歩鵜(かちう)

## 鵜飼山遠妙寺と謡曲『鵜飼』

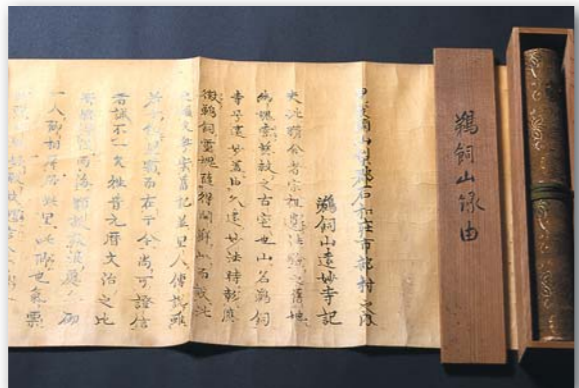
『鵜飼山遠妙寺(うかいざん おんみょうじ)縁起<sup>★15</sup>』は、笛吹市石和町市部にある遠妙寺の成り立ちを伝えています。要約すると次のようになります。「文永11年(1274年)、日蓮上人は法華経を広めるために甲斐国を巡り歩き、その途中で石和に立ち寄りました。ここで、鵜使い(うづかい)の亡霊に会ったため、弟子に三日三夜にわたって法華経八巻の一字を石に書写させ川底に沈める川施餓鬼(かわせがき)供養<sup>★16</sup>を行ったところ、鵜使いの亡霊は安らかに成仏することができました。その時に造った墓が遠妙寺の起源となっています。」

『鵜飼山遠妙寺縁起<sup>★17</sup>』に記されている「鵜飼漁翁亡霊濟度(うかいりょうおうぼううれいさいど)」の話は、すでに鎌倉時代末頃には関東一円に広まっていた。この話をもとに、世阿弥が能の台本である謡曲『鵜飼』に作り上げました。能『鵜飼』が完成したのは、今から600年ほど前の室町時代になります。

- ★15・・・鵜飼山遠妙寺縁起は、遠妙寺の起りを記したものだ。
- ★16・・・川施餓鬼供養は、水死者の霊をしずめるために川岸等で行う供養。
- ★17・・・鵜飼漁翁亡霊濟度は、日蓮上人が、石に経を書いて川底に沈める供養を行い、鵜使いの亡霊を救った話。



鵜飼山遠妙寺(うかいざんおんみょうじ)の山門



鵜飼山遠妙寺縁起(幕末 遠妙寺蔵)

## 鵜飼勅作

能や謡曲の演目としてよく知られている『鵜飼』は、江戸時代に入ると浄瑠璃や歌舞伎でも演じられるようになります。能や謡曲で「鵜飼漁翁(うかいりょうおう)」や「鵜使い」と呼んでいた人物は、浄瑠璃や歌舞伎では「鵜飼勅作(うかい かんさく)」という名前と呼ばれています。勅作の名前が初めて浄瑠璃に登場するのは、近松門左衛門の作品でした。こうしたことから、勅作の名付けの親は近松門左衛門ではないかと思われる。

★18・・・鵜飼勅作の話は、「親孝行の勅作が母の病気を治すために、殺生禁断の領内を流れる石和川(鵜飼川)で魚を獲ったため糞巻きの刑に処された。以来、亡霊となってさまよい村人を悩ませていた。日蓮上人が村に立ち寄った際に、弟子に経文を書かせた小石を川底に沈めて供養したところ安らかに成仏できた」という内容。



「日蓮聖人石和河にて鵜飼之迷魂を濟度志たまふ因」(写し絵)  
(原作は、月岡芳年 身延山久遠寺蔵)



遠妙寺境内に建つ漁翁堂



▶ 笛吹川右岸に建てられた  
鵜飼勅作翁の像

## 石和で行われていた鵜飼

ところで、なぜ石和で鵜飼が行われていたのでしょうか。平安時代後期に、甲斐国で唯一の御厨(みくりや)が石和に置かれていたことがわかっています。御厨は、神に奉納する魚を調達するための施設とその領地のことを言います。石和御厨の詳細な所在を示す資料は残っていませんが、現在の石和町窪中島の神明神社の近くにあったという説が有力です。

また、「鵜飼山遠妙寺縁起」には、鵜飼漁翁が殺生禁断の地である「観音寺境内を流れる石和川」で鵜を使って漁を行ったため、糞巻きの刑を受けたと記されています。

こうしたことから、神明神社や観音寺の近くを流れる鵜飼川は、アユ等の魚が獲れる格好の漁場であったと考えられます。そして、おそらくその漁法は、当時一般的で確実に魚を獲ることができる「鵜飼」であったと思われる。



▲ 薪能(たきぎのう)「鵜飼」の一場面  
鵜飼飛祥の地、鵜飼山遠妙寺にて  
(観世流能楽師 南條秀雄氏)  
[重要無形文化財保持者]

鵜飼参考本 ▲



▶ 石和鵜飼が行われている笛吹川  
(当時は石和川が流れていた)

## 遠妙寺の経石

遠妙寺に伝わる経石(きょういし)は、一字一石経(いちじいっせきょう)と言い、一つの石に経文を一字ずつ書いたものです。一字一石経は、鎌倉時代に始まり江戸時代に盛んになった風習で、病気を治したり、豊作を願ったり、靈魂を鎮めたりする目的で行われました。

遠妙寺の経石について記述する資料がいくつかあります。『和漢三才図会<sup>★19</sup>』は、甲州の代表的な土産品を紹介していて、その一つに石和川経石が載っています。また、『甲州新編<sup>★20</sup>』、『甲斐国志<sup>★21</sup>』、『並山日記』は、日蓮上人による「鵜飼漁翁亡霊濟度」の話とともに経石を紹介しています。

明治34年(1901年)に発行された『考古界』という雑誌に、山中笑の「経石に就きて」という論文が発表されています。その書き出しを要約すると、「全国各地で、小石に経文を一字ずつ書いたものが発見されました。これを経石と言います。もっとも有名な経石は、石和宿の遠妙寺に残っていて、日蓮上人が鵜使いの亡霊を成仏させたものです」という内容になります。遠妙寺の経石は、歴史上最も有名な経石と言えます。

- ★19・・・和漢三才図会は、江戸時代の図解入り百科事典。(正徳3年=1713年)
- ★20・・・甲州新編(こうしゅうばんし)は、山梨県の歴史資料。(享保17年=1732年)
- ★21・・・並山日記は、甲州道中や東海道の旅行記。(嘉永3年=1850年)



◀ 遠妙寺に伝わる七字の経石  
(ガラス容器に入っている)



▶ 万年橋右岸にある  
御硯水(おすすりみず)  
(経石に文字を書くために硯の水を汲んだ井戸)



甲州道中石和宿と  
いさわ鵜飼

笛吹川石和鵜飼保存会



富士三十六景「甲州伊澤暁（いさわあかつき）」

## はじめに

「甲州伊澤暁」は、江戸後期の浮世絵師・葛飾北斎の代表作で、石和宿が活気に満ちていた当時の様相を知ることができる資料です。

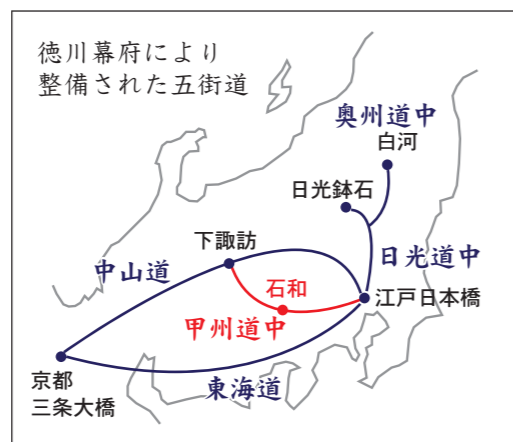
富士山の背後がわずかに明らみ、旅籠のかやぶき屋根がうっすらと明るくなり始めた暁の刻、いち早く荷造りをすませ、甲州道中を旅立つ人馬の姿が描かれています。旅人の行く手に見える石和川の川面からもやが立ち込め、鎌倉街道へと続く鶺鴒橋が浮かび上がって見えます。石和川は現在の笛吹川、鶺鴒川とも呼ばれ鶺鴒漁が営まれていました。

本紙は、甲州道中石和宿と、800年近い歴史を持つ石和鶺鴒の文化を学ぶための資料として作成しました。笛吹市の文化を再認識し、語り継いでいただければ幸いです。

資料提供：山梨県立博物館 鶺鴒山遠妙寺

【お問い合わせ】  
 笛吹川石和鶺鴒保存会・笛吹市観光商工課  
 山梨県笛吹市石和町市部 777（観光商工課内） TEL. 055-262-4111(代)

## 甲州道中と石和宿

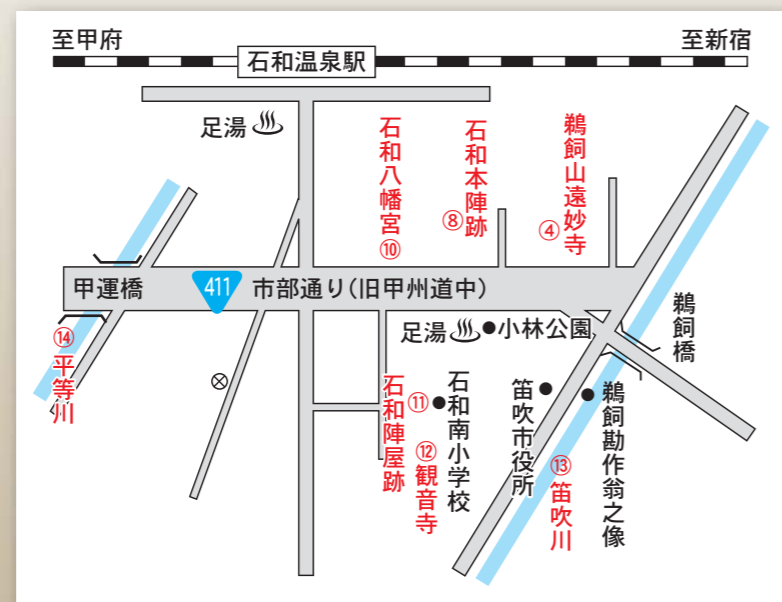


笛吹市石和町市部を横切る国道411号は、正徳2年（1716年）に「甲州道中」と呼ばれるようになりました。甲州道中は、日本橋と下諏訪宿を結び中山道に続く全長219キロメートルの幹線道路で、慶長年間（1596年～1615年）に徳川幕府によって整備された五街道の一つです。甲州街道と呼ばれることもあります。

「石和宿（いさわじゅく）」は、「甲斐国志」に、「八代郡市部村を石和宿とした」とあり、現在の笛吹市石和町市部に置かれていました。甲州道中には45の宿が置かれ、石和宿は日本橋から数えて38番目の宿になります。

甲州道中石和宿は、江戸と直結したことで、人馬や物資が行き交うようになり、宿場町として賑わいを増すこととなりました。

- ★1・・・宿（しゅく）は、街道に置かれた駅のこと。宿場。
- ★2・・・甲斐国志は、1814年に松平定能により編まれた甲斐国に関する総合的な地誌。



現在の市部通り周辺（略図）

## 甲州道中分間延絵図に描かれた石和宿

文化3年（1806年）の「甲州道中分間延絵図（こうしゅうどうちゅうぶんけんへのえず）」に、当時の石和宿の様子が描かれています。石和宿は、長さ5町（545メートル）、家屋85軒が建ち並ぶ甲州道中の宿場町で、鎌倉街道との分岐点にもなっていました。

また、石和宿は、笛吹川を通じて富士川水運へ連絡する船着場も置かれ、甲府盆地東部の水陸の交通の要所となっていました。

絵図を東（右側）から西（左側）へ進むと、はじめに①石和宿入口、続いて②字仲町の境界、③高札場、その北に④御朱印地遠妙寺（ごしゅいんちおんみょうじ）、西に⑤間屋場があり、その前から南東に⑥鎌倉街道が延びています。

- ★3・・・甲州道中分間延絵図は、江戸幕府が街道の管理のために道中奉行に作らせた地図。
- ★4・・・笛吹川は明治40年の大水害で約1キロメートル東を流れるようになった。当時、笛吹川があった位置には平等川が流れている。
- ★5・・・富士川水運は、甲府盆地と駿河湾を結ぶ水上交通。富士川舟運とも言う。
- ★6・・・高札場は、幕府からの注意書きや宿賃などを書いた札を掲げる所。
- ★7・・・間屋場は、馬やかごを旅人に用意した所。現在の駅やバス停。



甲州道中分間延絵図の石和宿周辺（山梨県立博物館蔵）

さらに甲州道中を西進すると⑦字西町となり、北に⑧本陣と脇本陣、西に⑨高札場、その隣に⑩（石和）八幡宮の鳥居が描かれています。本陣前を南下すると⑪（石和）陣屋、⑫御朱印地観音寺、さらに南に⑬石和川が流れています。

絵図の左端には⑭笛吹川が流れ、石和河岸（いさわかし=船着場）と西側の（甲府市）川田村の間には、渡し舟が運行していました。川田村へは、冬場の湯水期は橋を渡って行き来しますが、増水する夏場は徒歩渡しや渡し舟を利用します。

石和河岸からは、笛吹川を下って年貢米や物資を富士川の船着場に送る舟便も運行していました。

また、甲州道中は江戸からの身延参詣の人たちが通う道としても利用されました。十返舎一九らの「甲州道中記」に、石和から富士川まで舟で下り、身延山に参詣する様子が記されています。

- ★8・・・本陣、脇本陣は、公家や大名、幕府の役人が休泊した宿。
- ★9・・・石和陣屋は、石和代官所の建物。
- ★10・・・石和川は、現在の笛吹川の流れを流れていた小川。鶺鴒川とも呼ばれた。
- ★11・・・徒歩（かち）渡しは、人足に肩車してもらったりして川を渡る方法。
- ★12・・・甲州道中記は、浮世絵師・十返舎一九により書かれた旅行記。

## 石和陣屋（石和代官所）

⑩石和陣屋は、寛文元年（1661年）に開設された石和代官所の建物です。代官は支配下の村から年貢を集め、犯罪を取り締まるのが主な任務でした。現在、石和代官所の跡地には石和南小学校が建っていて、陣屋は残っていません。校門の左手に石和陣屋跡の石碑が建っているだけです。正門は、明治7年（1874年）に八田家御朱印屋敷に移築されています。



石和陣屋跡の石碑



八田家屋敷に移築された石和代官所の正門

## 旅籠と石和本陣

石和宿が置かれた当時は、旅籠（はたご）は一軒もなく、一般の旅人は民家に泊まっていた。幕末の天保14年（1843年）ころになると、大中小18軒の旅籠屋が営業するようになり、宿場町としての街並みが整ってきました。

一方、公家や大名、幕府の役人は、旅籠ではなく本陣に休泊しました。当時、本陣を営んでいた後藤家の資料に、宝暦11年（1671年）から天保5年（1834年）の164年間に、延べ174人が⑧石和本陣に休泊したことが記されています。信州高遠・高島・飯田の藩主が参勤交代の旅の途中に利用したほか、公家や役人が休泊しました。

なお、本陣の隣には、休泊しきれない場合に備えて脇本陣も置かれています。本陣及び脇本陣の建物は、明治13年（1880年）の火災で焼失し、現在は土蔵を残すのみとなっています。

## 石和宿を襲った水害

石和宿は、笛吹川と石和川にはさまれた低地にあったため、古くから水害に悩まされてきました。

江戸時代以降の記録によると、享保13年（1723年）の大洪水で150人の死者を出したほか、延享4年（1747年）の大洪水で石和村と日川村で人家150戸が流失しました。

そして笛吹川は、明治40年（1907年）の大水害で流れが一変し、現在の位置に移っています。このように石和宿は幾度となく水害に見舞われ、土砂に覆われた歴史を持っています。



石和本陣跡の石碑と土蔵



明治40年の大水害で浸水した石和宿『笛吹市風水害誌』より